

ない地域に成長した。

しかし、近年の“ディスカバー日本海”をキャッチフレーズとする多くの日本海側海岸砂丘の港湾化及び工業開発の波は三里浜砂丘地域にも及び、福井臨海工業地帯が現在造成されつつある。これにより、三里浜砂丘地域の農業生産基盤である畑地が約半分に減少してしまうことになる。それに対しては水田転換が行なわれ、工業開発以前の畑地率60%を保つこととなっており、畑地率7%という福井県においてやはり重要な畑作地域である。しかし経営耕地総面積は34%も減少することになるため、その減少した耕地では、より高度な土地利用を目指した集約農業が行なわれ始めた。今後とも諸施設が整えられた耕地で、より高度利用を目指す努力が続けられる必要があろう。

最後に工業開発についてであるが、最近の経済が低成長時代に入ったため工場誘致が進まず、現在先行き不安がある。そのため、元々越前加賀国定公園の一部であることを利用した観光開発への転換等の案も出されており、目下方針再吟味がなされている最中である。今後、ますます変貌してゆくとあろう三里浜砂丘地域を注目してゆきたい。

安八郡輪中地域における 町村境界線の意味について

河 合 令 子

安八郡の輪中地域は、西側を揖斐川、東側を長良川によってはさまれた洪水頻発地帯である。この安八郡輪中地域において、明治以後、進められた未作られた町村境界線が、住民とどのような関係を持つかを明らかにすることが、本論文の目的であった。

第一章においては、この地域を含む輪中地域全体について、その自然条件の上から洪水の起こりやすい理由を考察した。

第二章においては、上記のような自然条件に対する住民の工夫と努力の結果として作られた輪中について、治水の歴史と共に、どのような発達過程をたどってきたかを、歴史的に述べた。

第三章においては、政府の意向によってなされた、町村合併の過程と、それが、具体的に、この地域においてどのように施行されたかを述べた。

第四章においては、ここに居住する住民がこの町村境界線をどのようにとらえているかを、意識調査、具体的には、1人でも多くの人達に会い事を目的としたインタビュー調査によって明らかにし、又ここに居住する住民の生活様式と町村境界線については、農業集落カードによる指標を選び、それを基礎にして、区分をすることにより、町村境界線と対比して考察した。

これらの結果、町村境界線は、この地域の住民にとって意識の上ではなんら大きな意味を持たないということ、町名の地名に対する意識は、単なる記号的なものとして現住民にはとらえられている傾向が強いこと、町村合併の境界線変更の際には、これらの無関心層を、一部の積極的意見を持つものが、指導する形で行なわれたこと、そして、やはり、町村合併等に積極的意見を持っていた者は、地名に対する意識が高く、プライドや愛着心を持っていること等がわかった。

生活様式の上では、この地域は、ごく少数の非農村と、大部分の農村とに区分され、その境界線も市町村境界線と深いかわりを持たないこと、農村の生活様式を分類してみても、やはり市町村境界線と深い関係はなく、殆んど同質と言っても良い地域に境界線が引かれた、という形になっていることが、明らかになった。

埼玉県比企南丘陵における集落発達に 関する地理学的考察

金 指 みどり

〔目的〕 埼玉県ほぼ中央に位置する、比企南丘陵を取り上げ、平野にも、山地にも属さない丘陵地における集落発達の特徴を、各集落の成立年代を究明することによって、明らかにすることを目的とする。本地域は、行政区画でいうと、東松山市南部、嵐山町南部、鳩山村全域に当たる。

〔研究の枠組〕 以上の目的を達成するためには、過去における本地域の復元が必要である。

自然環境についても復元をしなければならないが、本論文では弥生時代、古墳時代前期を除き、現在とほぼ同じとして考察した。第二章では自然環境の中でも、集落立地と関係が深い地形、地質について述べた。地形については空中写真、野外調査等により、地形区分を行い、地質については、第三紀層上部と、丘陵全体に発達している物見山礫層を調査した。

第三章では、現在の集落の立地条件、分布形態、密度、機能として農業について述べ、まとめとして、農業集落区分を行った。この農業集落区分によって、現在の集落の特徴をつかむとともに、集落の成立、発展を考える上での重要な資料とした。

第四章は、本論文の目的である集落発達について、各時代ごとに様々の資料を使い、集落の様子を復元していった。

古代は、弥生、古墳時代集落址、古墳分布、奈良、平安時代窯跡群、交通路、条里遺構、和名抄郷名配置、寺院の動きから、また、中世は、集落址として追うことができないため、武士の城館跡、寺院の動き、関東地方特有の墓地に建てられた板石塔婆の分布、鎌倉街道の分布を使用した。特に板石塔婆には、建てられた年月日が入っているので、かなり詳しく集落の様子を知ることができた。

近世に入ると、一般に文書が多く残っているのだが、本地域、特に丘陵内では殆んど無く、新編武蔵国風土記稿を主に使用した。その他、埼玉県史、東松山史稿などによるしかなかった。

明治時代は武蔵国郡村誌を分析し、それ以降は、古い統計と、地形図によって考察を進めた。

〔結果〕 本地域の集落は、まず本地域東部、高坂台地上に成立し、丘陵周辺の経済力の向上とともに、丘陵内に開発の手が伸び、奈良時代から平安時代になってから、集落が成立していった。

これは、丘陵周辺には都幾川、越辺川が流れ、また低地が前面に広くあり、広い水田を開くことができるし、他の地域との交流も容易である。しかし、一方丘陵内では、細い谷ごとの谷津田しかないし、河川も無い集落立地には、極めて不利であり、谷津田と、溜池を造る技術が入ってくるまで、集落はなかったであろう。